

漢詩 : 文苑

著者	稼堂, 陳人, 飯田, 突兀, 古川, 高次, 中内, 義一, 杉山, 巴城, 十時斬魔
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 3
ページ	7 7 - 7 9
発行年	1896-02-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/4819

ちたる晋の王質の故事なり

權大納言資明

朝日山また影くらき明ほのに霧の下ゆく宇治のまは舟

朝日山ハ宇治川の川上にありきりの下行く見るやうなり宛然一幅の活畫圖

(未完)

麗洲客舍除夜

稼堂 陳人

萬里飄然意氣豪。流年只惜去滔滔。登樓遙望感無限。百二都城霜月高。

丙申元旦

街上鈴々車馬壓。向吾誰是賀迎新。一杯琉酒思屠散。七草餅盤識令辰。錦水風柔梅唇發。城山日暖柳眉伸。今年寂喜外征罷。海外初開萬戶春。

書感

一片案頭餅。暗生鼠忽來。點燈尋所自。窓隙寸餘開。

端艇競漕郎事五首

悠悠春影鏡中平。流盡寒光蒼靄橫。舉目忽然風色變。畫湖々上競漕聲。
甲艇底紅乙艇黃。更添丙艇色蒼々。聲如裂帛人如鶴。一棹戛然蹴浪翔。
波上砲鳴共鳥飛。如何短棹與心違。前舟脚滑後舟溢。兩岸呼聲氣一揮。
競渡既終起棹歌。溶々沈碧幾煙螺。湖心舟散人歸處。一隊群鷗落晚波。
世人爲樂不知淫。畢竟少時驚水禽。海國男兒請看取。一篙湛碧百年心。

冬日山居矚目

飯田突元

一

寒泉引砌際。夜々淪茶煎。滴瀝朝來絕。篔中白雪填。

二

一燈明又滅。獨坐夜三更。急霰斜々至。千山萬壑鳴。

三

飛雪紛々下。林西日欲斜。一溪人不見。飢鳥啄寒花。

四

晴雪萬山白。炊煙一縷揚。曉鷄何處唱。啞啞隔林長。

松浦川懷古神功皇后垂謬之地

松浦江邊古渡頭。垂綸遺跡一磯留。茫茫往事無由問。水碧砂明飛白鷗。

元且

古川高次

旭旗翻々歲華新。靄々瑞光滿四垠。黎庶總霑聖明澤。千門萬戶賀佳辰。

早春閑居

花信未傳鶯未鳴。早春何物慰幽情。柴門況又無人訪。閑聽茅簷殘滴聲。

雪望

中内義一

白雪飄々掩大空。千門總作水晶宮。幽人乘興銜杯坐。句就半醒半醉中。

元旦口占

杉山巴城

玉曆頒春天地新。瞳々旭日入佳辰。窃期今歲開生面。椒酒一杯吐句頻。

設成錄二

十時斬魔

北海鯤鵬化豈難。運機未至修雲翰。叢間斥鷃請休笑。一擊三千起怒瀾。
蓬萊求藥幾人還。身寄蜉蝣天地間。知己元來百年後。唯埋骸骨在名山。

稼堂先生曰 何等抱負

批評

再び『文學上に於ける現時の國家主義』を讀む

腕天窟主人

椿村學人健腕を振うて大に『文學上に於ける現時の國家主義』を論ずるや、余自ら揣らず、敢て所信を據へて疑惑を質す所ありき。不敏素より深遠高妙なる學人の立論を解する能はざり、去を恐る、豈敢て之を批評したりといはんや。學人の懇切なる、更に十有餘頁に亘れる長篇を草し、余輩の『妄を辯して立論の主意を明にし』、余輩の爲に諄々教訓を垂れたまひき。讀誦一過、先づ其の用辭の奇警なるに驚き、其議論の精妙なるに惘れ、杲然として言はん所を知らず。殊に其議論の飽まで叱咤的なるを見、通篇の用語決して車夫馬丁の惡言の如くならざるを信じ、翻て余が禮に嫻はざる過言を顧み來れば、忸怩として自ら禁する能はざるものあり。余輩既に立論の主意に於て疑ふ、冀くば更に前の椿村學人が議論に對して、敢て鄙見を吐露することを得せしめよ。